

氏名（本籍）	相羽大輔（東京都）
学位の種類	博士（障害科学）
学位記番号	博甲第 6711 号
学位授与年月	平成 25 年 10 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	弱視学生の障害開示が健常学生の支援意識過程に及ぼす効果に関する研究 ―開示内容，開示手段，開示相手からの検討―

主査	筑波大学教授 教育学博士	柿澤敏文
副査	筑波大学教授 博士（心理学）	大六一志
副査	筑波大学准教授 博士（学術）	山中克夫
副査	筑波大学教授 博士（スポーツ医学）	宮本俊和

論文の内容の要旨

（目的）

本論文は、弱視学生による障害開示がどのように健常大学生の支援意識過程に効果を及ぼすのかを解明するために、障害開示内容の有効性を評価した上で、健常大学生の開示内容への認知、弱視学生イメージ、交流・支援自己効力感に及ぼす障害開示の効果を、健常大学生の個人要因の影響を含めて把握し、その仮説モデルを提案して検討することを目的とした。論文は研究 1 から研究 7 からなる。

（対象と方法）

研究 1～3 では、健常大学生 282 名を対象に同性の弱視学生を想定させ、障害開示内容として健常学生と同様に行動ができるポジティブ条件、できないネガティブ条件、両者を含むミックス条件、非開示条件の 4 条件を設定し、そのうちの 1 条件の内容を文書で無作為提示し、認知評価項目（望ましさ，真正性，取り入り，内面性）（中村, 2003）、対人イメージ尺度（評価・魅力，活動性）（中村, 2003）、交流自己効力感尺度（交友関係，自己主張）（河内, 2003）への回答を求めた。各回答について、提示 4 条件と性別を要因とした分散分析により検討した。

研究 4 と 5 では、健常大学生 1,131 名を対象に、男子弱視学生による「工夫次第で同様に行動ができる」という開示内容を、開示場面（公的・私的）と開示手段（映像刺激・文章刺激）とを組み合わせた 4 障害開示条件のうちの 1 条件で無作為提示し、障害者イメージ尺度（尊敬，社会的同情）（栗田・楠見，

2010)、交流自己効力感尺度(交友関係)、新たに開発した支援自己効力感尺度(移動支援, 読み支援, 代筆支援)への回答を求めた。同性開示と異性開示別に、開示手段と開示場面を要因とする分散分析により検討した。

研究6は、開示手段の影響が見出された女子大学生 702 名を対象として、個人要因(希望職種, 関心度, ボランティア活動, 直接接触)への回答を求め、開示手段別に個人要因と障害者イメージ尺度、交流・支援自己効力感尺度(交友関係, 移動支援, 読み支援, 代筆支援)との関係を、分散分析により検討した。

研究7では、研究6の対象者に、開示内容への認知評価項目、障害者イメージ尺度、交流・支援自己効力感尺度、関心度を尋ね、開示手段別にこれらの関係を共分散構造分析により検討した。その際、開示内容への認知が交流・支援自己効力感尺度に及ぼす直接効果と、認知が障害者イメージ尺度を介して交流・支援自己効力感尺度に及ぼす間接効果を仮説モデルとして設定した。

(結果)

研究1～3で開示内容の有効性を検討した結果、ポジティブ条件とミックス条件では、望ましさ項目、対人イメージの各下位尺度、交友関係尺度の得点が有意に高く、開示内容が「健常学生と同様に行動できる」弱視学生の場合、そのイメージは肯定的になり、交流自己効力感が高まった。

研究4と5の結果、同性開示では、交流自己効力感尺度と支援自己効力感尺度について、私的場面と比較して公的場面の方がいずれも有意に得点が高かった。異性開示では、障害者イメージ尺度の尊敬尺度のみ開示場面の影響があった。一方、開示手段の影響は全ての尺度で認められ、映像刺激の方が文書刺激と比較して得点が有意に高く、イメージは肯定的になり、交流・支援自己効力感が高まった。

研究6の結果、映像刺激では、支援職群が一般職群よりも、また、弱視学生への関心高群が関心低群よりも全ての尺度得点が有意に高く、イメージが肯定的で交流・支援自己効力感が高まった。一方、文書刺激ではそれらの効果が移動支援や読み支援の尺度に限定された。その他の個人要因はいずれの開示手段でも影響しなかった。

研究7の結果、仮説モデルが支持されたのは映像刺激のみであった。直接効果は映像刺激・文書刺激ともに見出されたが、間接効果は映像刺激だけに見出された。間接効果について、弱視学生への関心低群の方が高群よりもイメージによる交流・支援自己効力感の抑制効果が強かった。

(考察)

研究1～3の結果、「健常学生と同様に行動できる」とする開示内容の有効性が明らかにされた。同様に行動できるという弱視学生ほど障害を乗り越えた特別な存在であり、魅力的な存在になる(河内, 2001; 富田ら, 2010)ことを支持する結果である。

研究4と5の結果、上記の開示内容をより効果的に活用するには同性開示と異性開示で異なる開示方略が必要であることが明らかとなった。同性開示では、授業のような公的場面での開示が重要であり、男子学生が人目を気にする傾向にある(Ha11, 1984)ことを支持した。一方、異性開示では、弱視の見えにくさを伝える映像刺激が重要であり、これは女子学生が具体的な情報に関心を持つ傾向にある(東, 1997)ことを支持した。また、研究6から、映像刺激を用いる際には弱視学生に関心を示す開示相手の

選択が重要であり、対象の具体的な提示が関心高群の弱者救済規範意識を高める(岸田・藤田, 2008)ことを裏付けた。

研究7の結果、映像刺激・文書刺激の共通点として、障害開示内容が肯定的に認知されれば交流・支援自己効力感を直接的に高めることが確認された。一方、喚起されるイメージの差が相違点として指摘され、文章刺激による言語情報では具体的な弱視学生イメージが形成されにくく(Donaldson, 1976)、映像刺激による具体的なイメージが間接効果をもたらすことが明らかにされた。間接効果で想起される弱視学生イメージは賞賛と同情からなる障害者イメージであり(栗田・楠見, 2012)、そのイメージは交流・支援自己効力感を抑制するが、関心が高ければこの働きが弱まることが指摘された。

審査の結果の要旨

(批評)

弱視学生による障害開示が健常大学生の支援意識過程に及ぼす効果を、開示内容、開示手段、開示相手の選択という3つの視点から丹念に検討した実証研究である。研究1～7における延べ4,900人に及ぶ対象者からの調査データをもとに、いかに障害開示を行えば有効な支援が得られるかを具体的に明らかにするとともに、支援意識過程のメカニズムに関するモデルを多変量解析による検証を経て提案しており、学術的価値が高いと判断した。博士論文として高く評価できる。

平成25年9月11日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(障害科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。